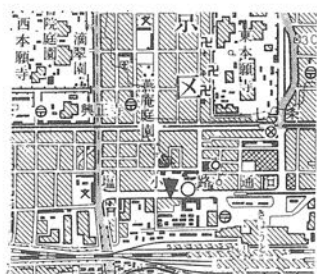


京都・平安京左京八条三坊跡

- 1 所在地 京都市下京区西洞院通り塩小路上ル東塩小路町
- 2 調査期間 一九七八年(昭53) 四月～六月
- 3 発掘機関 京都市埋蔵文化財研究所
- 4 発掘担当者 丸川義広 辻純一
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の時代 桃山時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

京都市埋蔵文化財研究所では一九七八年四月から六月にかけて、京都市下京区西洞院通り塩小路上ル東塩小路町において、下京区役所移転に伴う発掘調査を実施した。現場は西洞院通りと塩小路通りの交差点の北東隅で、平安京の左京八条三坊にあたる。



調査の結果、調査区の西半分は南北方向の河川跡「西洞院川」を、東半分に五基の井戸跡を検出し、また多くの遺物の出土をみた。西洞院川は幅一m以上、深さ二mあり、埋土中に多量の遺物を包含していた。出土遺物のうち、土器には土師器・瓦器・陶器・磁器等が、木製品には曲物・漆器・折敷・箸・櫛・物差し

・下駄等が含まれていたが、特に多様な木製品は当時の生活文化を知る貴重な資料として注目された。これらの遺物は、近世の中でもほぼ桃山時代に属するものである。

これら出土遺物の中に二点の木簡が含まれていた。木簡一は西洞院川跡の埋土第四層から出土し、木簡二は西洞院川跡の埋土第五層から出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・〱早瀬喜衛門尉

106×20×1 0.33

・〱雙甘本入

(2) ・〱越前北庄少〱×

(132)×28×1 0.33

・〱五太刀弁×

また、二点の木簡の切り込み上部には、木簡一では片面に「全」が、木簡二では両面に「〱」の墨書の記号をもつ点も興味深い。

さて、以上二点の木簡は、その形態や墨書の内容からみて、地方から京都に運ばれてきた物資に伴うものと考えられ、近世初頭の京都における商業活動を知る貴重な資料といえよう。さらに、木簡二にみえる「越前北庄」は戦国大名柴田勝家の居城で、寛永元年(一六二四)に現在の福井と改称されている。この点で、今回河川から出土した遺物群は、ある程度実年代の推定が可能となり、その資料的価値は大きい。

(丸川義広)